『ソモト・エモーショナル・リコール＆リリース』
関連資料（９）

引用・出典

◆もうひとりのあなた

　ジョン・Ｅ．アプレジャー（著）８３～９６頁

となった。

200人や300人もいる同僚の前で、何故、己の職業に誇りを持つ彼らが自分の醜態をさらすような事態を引き起こしたのだろうか？　それは、私にもわからない。しかし、同じ様な事態は繰り返し起きている。現在でも私は、体性感情解放法のセミナーでは3人から4人の実演を行うようにしている。それぞれのセミナーでは40人から50人の聴講生が出席し、過去5年間は年に10回近いセミナーを行った。また、その前の5年間も年に約5回のセミナーを行った。概算すれば、私は今までで少なくても75回のセミナーを行い、各セミナーで最低3回は実演したことになる。つまり40人から50人の聴講者の前で225回は実演を行った計算になる。それに加えて、それ以上の聴講者の前でも最低50回の実演をしている。その多くは、外国で行われたセミナーである。己で抑制しているのかも知れないが、その多くのセミナーで行った実演で何も起きなかったという記憶はない。幾つか思い出せるのは、治療を十分に終えずに中断した記憶が残っているだけである。治療が始まれば、実演の際の患者も私にも考えられない事態が引き起こる。しかし、私は体性感情解放法の過程を信じているし、確かな根拠もある。

私が考えるに、私達は自分の経験や記録を、知覚的に記憶するのではなく根源的に記憶しておくセンサーがあるのだと思う。このセンサーの感度は良く、我々を根源から防御している。しかし、残された記憶や経験は、徐々に表面に現れてくる。それが痛み、身体の一部への機能制約、不幸感、慢性的な怒り、過敏状態、また判断力低下として現れる。

センサーは記憶や経験自体は隠すことが大切であると考えている。ところが私達には、“能率のエキスパート”という、私が仮に名付けたもう1つの隠れた機能を持つ。能率のエキスパートは、私達にセンサーが隠したまま残る記憶や経験を身体の表面に引き出すことで、その人の生活にどのような影響を与えるのかを判断している。体性感情解放法は、その能率のエキスパートを助けて手を貸す役目を果たすのである。セラピストは能率のエキスパートに同調することで（患者が知覚できる部分以外の組織に隠れ持ち、エネルギー シストとして残されている記憶や経験を除くために）、センサーをリラックスさせて効果的な治療に導くのである。我々が持つエネルギーを用いて、また補助することで彼らがいつも持ち続けていた障害を完全に取り除けるのだと考えている。

これまで、幾つかの体性感情解放法によるセンセーショナルな体験談を紹介してきた。これからは、体性感情解放法がどのように毎日の生活に影響し、治療を行う人はどのように患者に施すかを説明して行きたい。

思い出すのは、ある理学療法士が手の施しようがなく、私を紹介した若い女性である。彼女は世界ランキング上位にいたプロのテニス選手で、テニス肘に悩まされていた。彼女は障害のために試合に出られず、トーナメント出場も諦めなければならない状態であった。紹介した医師は、彼が考えられる全ての治療を施したが、満足の行く結果は得ることはできなかった。彼はわずかに彼女の体調を回復できたが、彼女の愛する（多分愛していたと思う、後でわかるが･･･）スポーツに再び復帰できるまでには治せなかったのである。

初診の際（彼女は1週間滞在し、その間に4回私が治療する予定になっていた）、私は彼女の右肘と寛骨が関連していることに気付いた。私は、そのことを彼女に伝えると、彼女はより緊張を増し、寛骨に問題はないと強く否定した。治療を施す者と患者の間に信頼感以外の怒りや、それに類似した感情が存在している間は治療効果を上げることはできない。私は彼女の発言を大きな声で反発せずに聞き入れた。私は彼女に敵対心を抱いてもらいたくはない。そのため、最初のセッションでは、彼女の寛骨とテニス肘との関連を否定する意見を黙って受け入れた。

翌日の2回目の治療で、彼女の下肢長（足の長さ）を検査するために、私に背を向けて立つように頼んだ。私は肘と同様に、身体の土台を検査する必要があると説明すると、彼女もその意見を受け入れた。これで彼女が私に抱いている敵対心（センサー）の一部分がリラックスした。また彼女に潜む

能率のエキスパートも、彼女の体内に隠された問題を引き出す機会であることに気付いたはずである。常に私は触診しながら、その人の能率のエキスパートに私の気持ちや意図が伝わるように努めている。

私が彼女の骨盤の一部分と腰部の下方に手を沿えると、彼女の身体が前方に傾くように感じ取れた。私が前方に押しているのではない。触っているだけである。彼女の顔には、倒れまいとする自然の防御反応がうかがえる。私は身体を前に倒すように指示すると、彼女は身体を前に倒し始めた。そこで私が両手を床につくように言うと、彼女は両足と両手で身体を支える4つ足動物のような体勢になった。彼女の身体自体もその体勢が気に入っているようである。その体勢を取ると同時に、彼女の頭蓋仙骨システム脈は停止した。それは、その体勢でしばらくの間、保つことを意味する。すると私は直観的に強く右手を彼女の骨盤の右側に添えるように感じた。この骨は座る時に当たる部分で、座骨と呼ばれる。私がその座骨に手を添えると、突然彼女はすすり泣き始めて顔を床に伏せて泣き続けた。私は彼女の右座骨だけ触り、左手は離していた。15分か20分ほど泣き続けただろうか、その後、彼女は徐々にリラックスして頭蓋仙骨システムもリズミカルに再開した。彼女は、肩口から濡れた目で見上げながら、笑顔で私に起こしてくれるように頼んだ。

私は彼女を診察台に寝かせ、彼女との信頼感を深めるために、優しく頭蓋仙骨治療テクニックを施しながら、もし許すものであれば、泣いている間に起きたことを話すように言った。

彼女の話の内容は、次の通りである。3年ほど前、彼女はテニス国際トーナメント中にテニス肘によりトーナメントを放棄した。彼女は、その日に行われた試合で勝利を収めたが、試合内容は自分のコーチを納得させるものではなかったらしい。試合を終えた夜、彼女とコーチは誰もいないコートで口論した。コーチは段々怒鳴りながら、彼女を非難し始めた。彼女はコーチが口にした言葉を鮮明に(または鮮明と思えるように)覚えていたほどである。怒る彼女はコーチに背を向け、コートの出口に歩きだした。すると

るとコーチは怒って彼女の背中を後ろから強く突き飛ばした。彼女はコートに両手と膝をついて倒れかけてしまった。さらに怒るコーチは彼女の右尻を力任せに蹴り上げ、その結果、彼女の右座骨が骨折したのである。

骨折は圧迫骨折と診断された。彼女自身、その年は競技とトレーニングに激しい毎日を過ごしていた。コーチは毎日激しいトレーニングのプログラムを果たすように要求し、また全ての大きなトーナメントに出場するように強制した。ちょうどそのころに彼女のテニス肘による障害が出始め、当然、症状は悪化して行った。真相が突き止められたこの日まで、彼女はテニス肘は圧迫骨折とは全く関係の無い、全く異なる問題と信じていたのである。しかし、今ではテニス肘は全競技に出場したくないために起きたと判明した。彼女は、厳しいそのころの生活に再び戻りたくなかったのである。しかし、それが余計にコーチを激怒させ、怒鳴りつけ、非難し、突き飛ばし、蹴り上げる結果となり、彼女自身もこれ以上は我慢できない状態まで追い込まれたのである。コーチは彼女の父親であり、彼はチャンピオンになれなかった自分の夢を娘に託していた。父親の喜びや不満は、全て娘に向けられ、彼女の身体を通して欲求を表現していたのである。しかし彼女は今、自分の本当の生き方を見つけ出したのだ。

1時間もかからない体性感情解放法で、彼女は潜んでいた事実を全て明確に自覚した。彼女はテニス界から引退する決心をした。彼女自身、それほどテニスが好きではなかったことに気が付いたからである。テニスを愛していたのは、チャンピオンになれずに妄想に取りつかれていた父親である。その後の2回に及ぶ治療で、彼女の多くの組織メモリーやエネルギー シストが解放した。また私達は治療中に彼女の人生や、父親からの独立について多くを話し合った。そして父親についても多く語り合い、彼がいかに哀れであるか同情もした。彼女が抱いていた父親に対する怒りや恨みは、徐々に和らいだ。全て私にとっても彼女にしても、治療過程上、また経験上で非常に価値のある経験であった。彼女に宿る能率のエキスパートも、さぞかし幸福であるに違いない。なぜならこれだけの効果が各45分の治療時間で成し遂げられたのだから。

別の紹介したい素晴らしい体性感情解放法による体験は、激しい交通事故を負って訪れた若い女性である。この患者は外傷による後遺症はないが、事故以来8カ月間、慢性痛に悩まされたいた。彼女は事故により肋骨3本と骨盤を骨折し、むち打ち症を負った。骨折は全て完治したが、ほとんど毎日激しい頭痛に悩まされ、頭痛は夕方アルコールを飲む時だけ軽減する状態であった。頭痛は彼女が家政婦の仕事や庭仕事をしている間中、常に続いていた。また身体を曲げて胸郭の下方に圧力を加える度に首が痛んだ。事故が起きた時は、兄が車を運転したと言う。結婚歴もなく、また妊娠歴もない。しかし恋人は常におり、その恋人について人に隠すようなこともなかった。またそれを自慢にしているようにも見えた。

数回の治療で、私は彼女の骨格、筋肉、靭帯などの構造的疾患を探し出すことに努め、それが慢性痛や毎日襲う継続的頭痛の原因であると考えていた。その中で幾つかの異常を認め、治療によりわずかに回復したが、あまり効果を得たとは言えない。そこで頭蓋仙骨治療により骨髄の機能を治療してみると、効果が得られて首の痛みと頭痛が軽減した。しかし、背中の中央に及ぶ慢性痛は一向に回復せずに継続したままの状態である。私は、彼女を座らせた状態で何度も体性感情解放を引き出そうとしたが、いつも成功せずに終わった。彼女はただ座りながら、いかに痛みが激しいかを訴えるだけである。毎週(彼女は週に1度の間隔で治療を受けに来ていた)、私も自分の治療法を信じることに努めた。彼女を治療して以来、このような患者は数日間続けて治療する必要があると学んだほどである。治療期間が延びるほどに、患者の防御反応が増して行く。

10回の治療セッションで、私は常に治療台に座る彼女の後方から治療を行った。片手を慢性痛のある背中に置き、反対の手を彼女の頭上に置いた。私は注意深く彼女の脊柱の動きを検査し、同時に体性感情解放の過程に入り込むように祈った。そして、私の祈りは受け入れられたのである。突然、彼女は私が触れている手を激しく押し始めた。このように患者がコンタクトしている部分に力を加えてきた時は、同じ力で押し返すようにする。私は彼女の力と同じ力で対抗した。彼女はさらに力を増して私の抵抗

に逆らい、最後には後方に倒れかけてきた。

いつの間にやら私の手は拳に代わっているのに気が付いた。彼女は私の拳に向けて押し続けている。そして彼女は大声で誰かに対してののしり始めた。彼女はその男が彼女を邪魔し続けていると叫び、彼のことを“野郎”と呼びつけた。私は黙って彼女の言葉を聞きながら、体性感情解放の過程が進むようにだけ努めた。数分後、彼女は「クソッタレ！」と叫びながら身体を前に倒した。私は彼女に何が起きたのか尋ねると、13才の時に彼女は20才の男性と初めて性関係を持ったと言う。それはアルコール漬けの母親に反抗するためであったと言う。ある夜、彼女が門限に遅れて帰ると、母親はドアに鍵をかけて家の中に入れてくれず、そのために彼女は一晩中、表に出されてしまったのである。しばらくの間、自転車に乗って辺りを走っていると、ある男が彼女に話しかけてきた。彼は自分のアパートに誘い、初めての性体験をしたのである。数日後、彼女は兄と2人きりの時にそのことを話した。兄は保護的になり怒りだした。2人は言い争いになり、兄は右手で私が拳で彼女の力に対抗していた背中の中央部を強く殴ったのである。私の手が拳に代わり彼女の力に対抗したことで、彼女が抱いていた兄に対する感情のエネルギーと、事故で負った肋骨の骨折で得たエネルギーが同時に吹き出したのである。

兄が彼女の背中を殴っていなければ、おそらく彼女の事故での肋骨の骨折による痛みは留まることなく、完治していたに違いない。しかし、組織が完全に解放して治癒するには、その他の何らかの働きが必要であったのである。兄が殴った環境を再現させたことで、隠れていた感情が溢れ出したのだ。次に兄に殴られて以来、兄が自分のボス的存在ではないことを証明したいがために、次々に恋人を代えて性的関係を繰り返したのである。常に彼女の恋人は自分よりも10才以上年上の男性であった。そして偶然、兄が運転していた時に事故に遭ったために、事故と兄に対する潜在した感情が無意識に結びついた。そして、彼女自身も無意識の内に痛みを継続させ、兄に対する反抗感を性行為を繰り返すことで表現し、自分自身のためではない、また愛情を確認し合うでもない性行為を繰り返して反抗し続け